

# 市史の小徑

## 東海道を虎がゆく

今年が寅年。虎は日本には生息しませんが、「牡丹に唐獅子、竹に虎」のことがあつたように、めでたい画題として頻繁に取り上げられてきました。しかし古い虎図は猫のようで、とても虎には見えません。絵師たちは頭骨や毛皮などを求め、少しでも本物の虎に近づけようとしたそうです。虎の意匠は絵画だけでなく、建築や工芸、服飾などにも用いられ、本市最古は油日神社本殿の幕股かふるまたにある「竹に虎」の彫刻で、室町時代にさかのぼります。また、水口曳山祭の曳山を飾るダシの作り物にも「和藤内の虎退治」としてしばしば登場しています。

万治まんじの頃といいますが今から350年余りも前のこと、東海道水口宿に生きた虎の通つたこ



▲曳山上の虎

とが記録されています（「聞書」・河合家文書）。それは「虎江戸へ下り当地藪下に泊り候よし、おりに入れ参り候よし、食物に犬子・にわ鳥等おりに入れ候らえば、両足にてふまえ引きさき喰候よし、祖母物語に承り候」というもので、檻にいれられて運ばれる虎は、南蛮屏風などに描かれるものをほうふつとさせます。見せ物だったのかオランダ商館の献上品であったのか不明ですが、將軍や琉球使節の通行と同じ扱いで記録されていることからして、その猛々しいさまが、人々に強烈な印象を与えたことは確かなようです。

『甲賀市史』第1巻・第6巻好評販売中

【価格】各巻1冊 3,500円

問い合わせ

歴史文化財課 市史編さん室

甲南庁舎3階

086-80075  
086-80216

【市史販売所】

〈水口〉TSUTAYAさんぽうどう・ハタヤ書店・山川書店・山田書店・水口歴史民俗資料館  
〈土山〉ウエノ・新名神土山サービスエリア案内所・道の駅あいの土山・土山歴史民俗資料館（甲賀）かぶか生涯学習館（WING甲南店）市史編さん室（信楽）大宝堂谷川書店・信楽中央公民館

## みんなの窓

### 相手の気持ちを

### 「聞く」？「訊く」？「聴く」？



わたしたちは、日々その瞬間にさまざまな気持ちを抱いて生きています。うれしい気持ち、悲しい気持ち、幸せな気持ち、嫌な気持ちなど。では、このような気持ちはわたしたちにとってどんな意味をもつのでしょうか。

例えば、けがや虫にさされた場合、痛みやかゆみなどの感覚とともに、出血、腫れなど目に見える変化が起こります。でも、心の中は目では見えません。だから、幸せな気持ちは心の中が安心して、怒りの気持ちは心の中が傷ついていることというように、気持ちは、その時わたしたちの心の中で起きていることを知らせているのかもしれない。

子どもたちは、よく「ムカつく」「キレそう」などの表現を使います。しかし、怒りや悔しさ、悲しさの気持ちを言葉にして相手に伝えるのは、相手を傷つけないからではなく、相手に自分の気持ちを理解してほしいからです。わたしたち人間は、相手に自分を理解してほしいという強い欲求をもっているのです。

うれしいことがあったときに、それを言葉にして誰かに伝え、それをきいた人が一緒に喜んでくれると、あなたのうれしさはきっと2倍になることでしょう。

一方、怒りたくなつたときに、それを言葉にして誰かに

伝え、それをきいた人がなぜ怒っているのかわかってくれれば、あなたの怒った気持ちは、きっと半分になることでしょう。でも、わたしたちは、相手の気持ちまで「きく」ことができているのでしょうか。

わたしたちは、困っている人に「たずねる」ことはよくしています。「いったい、どうしたの？」「何があつたの？」と事実関係をたずね、状況を把握して、悪いのは誰かを突き止め、謝らせるなどの決着をつけるということは、よくしています。でも、いくら決着をつけたところで、その人が気持ちをきいてもらい、気持ちを語ることがなければ、心が傷ついている人にとって何も解決したことになりません。

まずは、相手の気持ちを「きく」ことから始めてみましょう。そのときの「きく」は、「聞く」（聞き流す）ではなく、「訊く」（事実を問う）でもなく、「聴く」（耳を傾け、注意して聞き取る）でありたいものです。

いちばん悲しいときは気持ちがわかってもらえないとき  
\*  
いちばんうれしいときは気持ちが通じあえたとき

参考「気持ちの本」（森田ゆり 童話館出版より）

問い合わせ 人権推進課 ☎ 65-0693 ☎ 63-4582